

就職戦線異状なし

杉元伶一



しゅうしょくせんせん いじょう
就職戦線異状なし

すぎもとれいいち
杉元伶一

© Reiichi Sugimoto 1992

1992年5月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——信毎書籍印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。

(庫)

ISBN4-06-185147-0



講談社立庫

江苏工业学院图书馆

藏書
就藏戰綫異章なし

杉元伶一

講談社

目 次

恐るべき優秀な学生——11

内因と外因と要因——29

「ねえ聞いて」攻撃——43

提出書類の書き方——61

内々定降臨——76

我かくてスパイダーマンとなりき——89

去年の夏の日——114

就職問題討論会——142

白い部屋にて——168

転戦スケジュール | 181

迷宮の試験会場 | 197

負傷兵士の慰問 | 211

祝辞と分析 | 238

最終面接 1 | 273

天使のため息 | 292

俺たちは決して忘れない | 304

最終面接 2 | 320

エピローグ | 336

解説 群ようこ | 340

就職戦線異状なし

会議室の壁には居並ぶ役員お歴々、彼らが睥睨する対面中央の椅子にはリクルート・スーツの大原が身を固くして座っている。

「大学時代に大原君が最も熱心に取り組んできたことは何かね？」

左端のデブが代表して書類に目を落としたまま、大原に質問をした。

大原は傍らに置いたアタッシュケースを取って揃えた膝の上で開き、無言のまま、てきぱきとMP5A3サブマシンガンを組み立てる。マガジンを叩き込み、セレクターをフルオートに撥ね上げると、大原は立ち上がった。言った。

「殺し屋です」

グレーの絨毯に空葉莢をばら蒔きながら、右から左へ銃口を腰高水平に滑らせていき、一人外して役員を薙ぎ倒した。

机の下に逃げ込んで震える社長は、散らばった書類を掻き集めて叫んだ。

「内定！」

恐るべき優秀な学生

早稲田大学49号館地下、本格文芸倶楽部の部室には、夏休みにもかかわらず、大勢の部員が一攫千金を狙って集合していた。

文学部三年、飯塚が掲示板に出走表を張り出し、千円札を握りしめて注目する一同に深々と頭を下げ、挨拶をした。

「本日は八月一日、求人票が公開され、いよいよ就職シーズンの到来となりました。即ち、本格文芸倶楽部、晩夏の風物詩、内定獲得レースの開幕であります。昨年はおろくな馬がおらず、中止の憂目に逢いましたが、本年度は来春卒業予定、四頭もの出走馬に恵まれ、波乱含みの展開が期待されます。対象となるレースは大手マスコミ、放送、出版、新聞の三業種であります。何か質問はありますか」

一人の部員が手を上げて、

「大手マスコミかどうかは誰が決めるんだ？」

「何をもって大手とするかは判断の難しいところですが、便宜上、申告所得十億、初任給二十万以上を基準にし、知名度、イメージを考慮して、就職内定獲得レース運営委員会が決定します」

もう一人が手を上げ、

「配当はどうなってんだ」

「総売上げを勝ち馬で割って、馬券購入者の分配となります」

更に一人が手を上げ、

「四人とも内定取れなかった時は？」

「縁起でもない。しかし、充分予想される事態です。その場合は払戻しします。他には？ ありませんね？ 馬券は単勝のみ、一枚百円で、発売は今日から八月二十日まで、会社説明会解禁をもって締め切らせて頂きます。枰順、データは表の通り。それでは、皆さん、他人の人生で大金を掴みましょう！」

4	3	2	1	枰番
スカーレット大原	ジーニアス糸町	ポバティ立川	シトロエン南野	馬名
社学	政経	文学	文学	厩舎
牡5	牡5	牡4	牡4	性齢
笑	不明	優少	全優	成績
癖	差	短	先	脚

部員は掲示板へ押し寄せ、1棒二十枚、3棒十枚、大穴狙いで4棒一枚、などと口々に叫びながら、千円札を飯塚に叩きつけた。

ラジオ局のスタジオを大原がよろめいて後にしたのは午前二時を回っていた。

虎ノ門の交差点でようやくタクシーを拾い、後部シートにぐずぐずと崩れ落ちてから、さて、今夜は誰の家に襲撃をかけたものか。

菊千代はモデルの彼女の仕事にくつついて地中海へ優雅なサマー・ヴァケーションで不在。帰国予定は九月末。

南野は深夜突然の訪問に対して理解を示す寛容さを持ち合わせていない。

武井先生は十中八九女をお連れ込みになってよろしくやっていらっしやることだろう。彼は友情に厚い変態だから、歓迎はしてくれるだろうが、OOOHHH——と嬌声から体位を推察しながらキッチンの床でまんじりともせず夜を明かすのは辛い。

田中の所なら朝まで無修正ビデオ大会、糸町の所ならベースとギターを持ち出してきて、近隣住民総立ちの3コード・セッションが始まる、疎遠な後輩の誰かれに気を遣わせるのは忍びない。ともかく三十六時間起きっぱなしの今夜はゆっくり眠りたいだけだ。

「お客さん、どこまで？」と運転手。

「あー、仕方ないから下落合二丁目まで」

立川修の貧民宿なら余計な気遣いは無用だ。あいつは俺に友好的でないが、金を貸している強

みがある。借金を清算しないうちは俺の下僕だ。叩き起こしても文句は言わせない。

留守かもしれないし、ドアを開けないという抵抗に会うかもしれないが、あんなボロ下宿のドアなんか蹴飛ばせば開くだろう。

案の定、ドアは蹴飛ばせば、開いた。

「ひー、なんだなんだ、なんだ。ノックもしないで、いきなり押し入ってきて……」

六帖一間の下宿で小津安二郎『大学は出たけれど』のビデオを見ながら、ミルク・パンから茹でたソーめんを啜っていた立川修は大原の唐突な出現に肝を潰した。

「あれ、ノックしなかったか。いやー、立川君、起きていたかね」

大原はずかずかと上がり、冷蔵庫から缶ビールを抜いて飲み干し、鞆から携帯用歯ブラシを取り出すと、ソーめんを喉につまらせ、むせ返る立川の前で、ガシガシ磨き、簞笥からまっさらのシーツを探してベッドに広げ、倒れ込んだ。

「立川君、おやすみなさい」

立川はミルク・パンをテーブルに叩きつけ、シーツの端を掴んで力まかせに引っ張り、大原をベッドから転げ落とした。

「ふざけるのもたいがいにしろ。こんな真夜中に何しに来たんだ」

「寝にきてやったんだよ」

寝にきてやっただー、立川は呻き声を上げて事態を反芻し、本や雑誌、新聞の束を積み上げて足の踏み場もない部屋の中を巧みに歩き回りながら、驚きと怒りに整理をつけた。

「来るなら来るで電話くらいしたら？」

「料金不払いでいつも不通じゃねえか」

「この時期に不通にしている訳がない。大体なんで僕の所に寝に来なけりゃならないんだ」

「仕様がねえだろ。番組の収録が延びに延びて、終わったのが二時過ぎだったんだよ」

「自分の家に帰ればいいじゃないか」

「俺んち、大宮だぜ。タクシーで羽根倉橋を越えたら、メーターが四桁になって、バック・シートで俺はたじろいでしまう」

「そんなこと知ったことか。誰か他の奴の家に行けよな」

大原は低い声で言った。

「よくもまあ平然とそういう口がきけるな。お前、自分を何様だと思ってんだ」

「さあ、何様なんでしょう？」

「立川さんの馬名はどうしようか」と内定獲得レース運営委員長の飯塚は、出走表を作成する会議の席上、言った。

「あの人の最大の特徴といえば？」と委員の一人が尋ねた。

「物欲とスケベは人一倍のくせに、経済力が伴わないことだろうな。端的に表現すれば、貧乏だ」と一人が答える。

「ポバティ立川にしよう」と飯塚は決定した。